

THE
HOSHINA
ACADEMY
Chamber Orchestra
“Ensemble=Harmonia”

ごあいさつ

本日はお忙しい中、保科アカデミー室内管弦楽団第8回定期演奏会に御来場頂き、誠に有難うございます。

昨年の第7回定期は、当団音楽総監督・保科洋先生にすべてをおまかせしての演奏会でした。従来のプログラムとは趣を異にしておりましたが、アカデミーの個性が十分發揮される非常に意欲的なプログラムであったと自負しております。幸いにも兵庫県東条町公演でも倉敷公演でも、大勢の方々にご来場頂き、暖かい拍手と励ましを頂戴し、メンバー一同大変感謝しております。

今回は、テノール・オーポエ・ヴァイオリンの三名のソリストを迎えた盛りだくさんのプログラムで、シューベルト、ベートーヴェンに並んで、保科先生の作品を演奏いたします。指揮者・指導者としても類稀なる才能をお持ちの保科先生ですが、一番のご専門である作曲における素晴らしさを是非皆様にお伝えしたいと思っております。オープニングに演奏します交響曲第3番は、『魔王』と同じくシューベルト18歳の作品です。若々しく澆刺としたこの曲の魅力がお伝えできたらと思っています。『ます』『魔王』はピアノ伴奏でも素晴らしい作品ですが、今回は保科先生の編曲による管弦楽伴奏版です。モノクロからカラーへといった色彩感をお楽しみ下さい。『祈りそして戯れ』は今後この分野で重要なレパートリーになると確信しています。『懐想譜』は第5回定期で管弦楽版を初演しましたが非常に好評でしたので、今回再演いたします。ベートーヴェン唯一のヴァイオリン協奏曲は松原氏をお迎えして、本日のメインとして演奏いたします。

今年は備前・倉敷の県内2公演に加えて、創立10周年記念として初の東京公演を企画しました。準備は大変でございましたが、メンバーはじめ関係各位のご協力のおかげで何とか実現できそうあります。「音楽の基本は自己表現であり、いかに相手に自分の感情（音楽）を伝えることができるかが大切である」と保科先生は繰り返しおっしゃられます。プロのオーケストラだけでもたくさんあり、また多くのアマチュアオケがひしめく東京に我々がわざわざ出向いていくのは、そういう場所でどれくらい私達の音楽が伝わるかを確かめてみたい部分があることと、もう一つには保科先生の作品を多くの方に聞いて頂き、その素晴らしさをお伝えしたいということです。そしてもし好評を得ることができましたら、是非近いうちに保科先生にメインを振って頂いての東京公演を実現させたいと考えております。

忙しい社会人が中心のため、月に一度の練習だけでは、なかなか理想通りにはいきませんが、逆にその分集中し、『保科理論』という音楽文法を最大限に利用し、理論的に能率よく練習するという方針を守ろうと思います。運営方法、選曲内容、演奏解釈、練習形態、練習時間などのあらゆる点でこのオケは極めて個性的なアマチュア音楽団体であると自覚していますが、こうして広く皆様に演奏を聴いて頂き、御批判を仰ぐことにより、閉鎖的、自己満足的な団体に留まらないようにしたいと思います。そして岡山大学交響楽団のOBとして、また快く名前の使用をお許し頂いた恩師保科洋先生の名に恥じないような解釈・演奏を目指したいと思います。

最後になりましたが、今回の演奏会開催にあたりまして多くの方々にご協力頂きました。この場をお借りして厚く御礼申し上げます。引き続き今後ともよろしく御指導御鞭撻を賜りますよう重ねてお願い申し上げます。

それでは最後までどうぞごゆっくりお楽しみ下さい。

保科アカデミー室内管弦楽団

“アンサンブル=ハルモニア”

主宰 秋山 隆

2004/8/28 [土] 備前市市民センター
<木村病院開設25周年記念特別公演>

2004/8/29 [日] 倉敷市芸文館
<第8回定期演奏会倉敷公演>

2004/9/11 [土] 第一生命ホール
<創立10周年記念東京公演>

主催：保科アカデミー室内管弦楽団

後援：木村病院

保科アカデミー室内管弦楽団後援会
『はなの里』&『響塾洋楽堂』

プログラム

Franz Schubert / Sinfonie Nr. 3 in D, D200

☆シューベルト／交響曲第3番ニ長調 D200

- I. Adagio maestoso - Allegro con brio
- II. Allegretto
- III. Menuetto; Vivace - Trio
- IV. Presto vivace

Schubart - Franz Schubert (Hiroshi Hoshina) / Die Forelle

Goethe - Franz Schubert (Hiroshi Hoshina) / Erlkönig

☆シューベルト（保科洋編曲）／『ます』『魔王』

Takashi Tsugami, Tenor

テノール独唱：津上 崇

Hiroshi Hoshina / Oraison et Jeux sous un rai lumineux (pour Hautbois et Orchestre)

☆保科 洋／『祈り そして 戯れ～光のもとの～』

Lento - Allegro - Tempo I - Allegro

Junko Tsugami, Oboe

オーボエ独奏：津上順子

Hiroshi Hoshina / Mnemosyne ~Souvenirs d'année en année~ (pour Orchestre)

☆保科 洋／管弦楽のための『懐想譜』(改訂版)

Moderato - Allegretto non troppo - Moderato

< 休憩 >

Ludwig van Beethoven / Violinkonzert D-dur, Op. 61

☆ベートーヴェン／ヴァイオリン協奏曲ニ長調

- I. Allegro ma non troppo (Cadenza: 松原勝也)
 - II. Larghetto
 - III. Rondo (Cadenza: 松原勝也)
- Katsuya Matsubara, Violin
ヴァイオリン独奏：松原勝也

* * *

Takashi Akiyama, Conductor

指揮：秋山 隆

Aki Washino, Concertmaster

コンサートマスター：鷺野 亜紀

曲 目 解 説

☆シユーベルト／交響曲第3番ニ長調 D200

(演奏時間：約22分)

「福原が卓球を選んだのではない。卓球の神様が福原を選んだのだ」とは、そのコーチの言葉ですが（オリンピック中継の時にアナウンサーがそう言ってた）、神様に選ばれし人が、作曲家にも何人かいます。モーツアルトしかり、メンデルスゾーンしかり……。そしてこのシユーベルトも早熟多作の天才としてその一人に数え上げができるでしょう。シユーベルト18歳の時のこの作品は決して有名ではありません。今日初めて聴くという方も多いと思います。ただ、先日ついに逝ってしまった最後のカリスマ指揮者＝クライバーが、めちゃくちゃ数少ないレコーディングの中でこの曲を「未完成」のカップリングに入れたということで、聴いたことはないが家に帰ったら一応CDはある、という人もいるかも知れません。ではこの曲がどんな感じなのかを少しばかり紹介することにしましょう。

クラリネットが要所で主役を務める第1楽章。冒頭のアダージョのゆったりとした曲想に浸りながら次第に曲は高まりアレグロへと転ずる所のワクワク感はまさにシユーベルトの独壇場です。

第2楽章は14世紀のドイツ民謡を使用しているとされています。のどかな雰囲気で前記のCD解説書のオズボーン氏によれば「逢い引きのため野原をスキップしたり、爪先で歩いていく興奮しやすい若い教員」とあります。シユーベルトは当時、父親の勤める小学校の助教員をしていたので、こう評したのでしょう。

第3楽章は舞曲です。その主題はアウフタクト（上拍）を強調したもので、この強調が全体の特徴になっています。中間部は室内樂的なセレナード風味に仕上がっています。この部分をオズボーン氏に倣って評するとしたら「ぽかぽかした陽気の中、野原で恋人と踊る興奮しやすい若い教員」というところですね。

第4楽章はタランテラのリズムをとったダイナミックな素晴らしい楽章です。タランテラとは、急速な6/8拍子で次第に熱狂の度を加えるナポリの舞曲のことと、その語源は、毒グモのタランチュラに刺されて踊り狂う人間の様子を表したものだと、かまれた後にこの舞曲を踊ると毒が消えるという伝説に由来するなどと言われています。したがってこれは「野原で踊ってたら毒グモに刺されて七転八倒する興奮しやすい若い教員」と解釈できるでしょう（ホントか！？）。またAINシュタインによるコメント「フィナーレというより序曲」という印象がCD解説書に載っていますが、それからも分かるようにコンサートのオープニングを飾るに相応しい曲です。

<文責：山本浩之 H.11卒部 ピオラ>

☆シユーベルト／『魔王』・『ます』

(演奏時間：合計で約7分)

=シユーベルトのドイツ歌曲によせて=

ドイツ語には同じ意味でありながら、異なる言葉がたくさんあります。〈音としての言葉の存在〉というドイツ語の特徴を、ドイツ語の歴史の中で作り出したのは、詩人の他にありません。言葉の母音の長さ、明暗、強弱等、発音上の決まりがたくさんあり、詩人はその言葉を厳選し、文学としてのみならず、言葉を音楽として芸術の域に高めたのです。

作曲家は、その詩人の作り出した言葉の音楽に自分の音楽を付け、作曲家自身の世界を作り出します。そこに、ドイツ歌曲のおもしろさの一つがあります。

詩人のハイネは「ヨーロッパの各人が緑の森で、うぐいすを審査員として歌の国際コンクールをひらけば、疑いもなくゲーテが優勝する」と言っています。つまり歌は、歌手や作曲家のものではなく詩人のものだと。ゲーテの詩なくしてシユーベルトにより完成されたドイツ歌曲はなく、また後に続くドイツ歌曲はなかったと言えます。31年という短い生涯の間に600曲以上の歌曲を作曲したシユーベルトですが、その選んだテキストの72曲もがゲーテの詩で、一人の詩人に対する付曲の多さでは他の詩人に比類ありません。ドイツ最高の詩人ゲーテは当時の疾風怒濤の精神の中、自然と自然に根ざした自己の内部の声に創造の基盤を求めるにより真の抒情詩をもたらし、その詩が多くの作曲家の靈感に働き、ドイツ歌曲の運命を導きましたと言えます。1814年、17歳のシユーベルトは初めてゲーテの詩に曲を付け、それが『糸を紡ぐグレートヒエン』です。その瞬間にドイツ・ロマン派歌曲の歴史が始まったと言われています。1年後の1815年シユーベルトはわずか18歳で『魔王』を作曲します。ゲーテの詩の中で死の恐怖が忘れない表現で歌われており、シユーベルトは独特的のドラマを描き出しています。曲頭、すさまじい3連音の連なりが疾駆する

曲目解説

馬蹄の音を描き、その響きは情景の変化や感情の起伏と結びついて全曲の支えとなっています。完全な通作形式で書かれ、低く力強い父の声、この世ならぬ魔王のささやき、鋭い不協和音に彩られた子供の恐怖の叫びと、三様に使い分けられた声による物語の進展は、転調に次ぐ転調を重ねて劇的な頂点に盛り上がっていきます。

『ます』はシューベルト（Schubert）の詩による1817年の作品で、この詩人は音楽にも堪能で、この詩には自作曲もあります。詩は本来4節からなりますが、シューベルトは最後の1節を省いて作曲しました。はじめの3節は清らかな小川に遊ぶ魚が、狡猾な釣師の竿にかかるさまを歌った内容ですが、第4節は、そんな誘惑者にひっかかるないようにと娘たちを諭す内容になっています。小川のせせらぎや魚のきらめきなど、シューベルト独特のさわやかな情景描写が快く、この歌の旋律をとり入れたピアノ五重奏曲もよく知られています。

シューベルトの歌曲は音楽的な発想の宝庫であり、展開の豊かさ、ある種の歌曲に見られるドラマ性、暗示される多彩な音の世界など、すべての要素がのちの作曲家たちを魅了し、多くの作曲家がオーケストラや器楽曲に編曲をおこなっています。

＜文責：津上 崇 テノール独唱＞

Die Forelle (Schubart)

In einem Bächlein helle,
Da schoß in froher Eil'
Die launische Forelle
Vorüber wie ein Pfeil.
Ich stand an dem Gestade
Und sah in süßer Ruh'
Des muntern Fischleins Bade
Im klaren Bächlein zu.

Ein Fischer mit der Rute
Wohl an dem Ufer stand,
Und sah's mit kaltem Blute,
Wie sich das Fischlein wand.
So lang dem Wasser Helle,
So dacht' ich , nicht gebricht,
So fängt er die Forelle
Mit seiner Angel nicht.

Doch endlich ward dem Diebe
Die Zeit zu lang. Er macht
Das Bächlein tückisch trübe,
Und eh'ich es gedacht,
So zuckte seine Rute,
Das Fischlein zappelt dran,
Und ich mit regem Blute
Sah die Btrogne an.

Erlkönig (Goethe)

Wer reitet so spät durch Nacht und Wind ?
Es ist der Vater mit seinem Kind;
Er hat den Knaben Wohl in dem Arm,
Er faßt ihn sicher, er hält ihn warm.

„Mein Sohn, was birgst du so bang dein Gesicht ?“
„Siehst, Vater, du den Erlkönig nicht ?
Den Erlenkönig mit Kron' und Schweif ?“
„Mein Sohn, es ist ein Nebelsteif.“

„Du liebes Kind, komm, geh mit mir !
Gar schöne Spiele spiel' ich mit dir;
Manch' bunte Blumen sind an dem Strand,
Meine Mutter hat manch' gülden Gewand.“

„Mein Vater, mein Vater, und hörest du nicht,
Was Erlenkönig mir leise verspricht ?“
„Sei ruhig, bleibe ruhig, mein Kind:
In düren Blättern säuselt der Wind.“

„Willst, feiner Knabe, du mit mir geh'n ?
Meine Töchter sollen dich warten schön;
Meine Töchter führen den nächtlichen Reih'n
Und wiegen und tanzen und singen dich ein.“

„Mein Vater, mein Vater, und siehst du nicht dort
Erlkönigs Töchter am düster'n Ort ?“
„Mein Sohn, mein Sohn, ich seh' es genau:
Es scheinen die alten Weiden so grau.“

„Ich liebe dich, mich reizt deine schöne Gestalt;
Und bist du nicht willig, so brauch' ich Gewalt.“
„Mein Vater, mein Vater, jetzt faßt er mich an !
Erlkönig hat mir ein Leids getan !“

Dem Vater grauset's, er reitet geschwind,
Er hält in Armen das ächzende Kind,
Erreicht den Hof mit Müh und Not:
In seinen Armen das Kind war tot.

曲目解説

☆保科 洋／祈りそして戯れ～光りのもの～

(演奏時間：約12分)

この曲は、オーボエ奏者広田智之氏の委嘱によって、同氏のリサイタルを記念して昨年6月から8月にかけて作曲したものですが、今回「保科アカデミー」室内管弦楽団の東京公演を記念してオーボエとオーケストラ用に編曲したものです。

いずこからともなくキラキラと降り注ぐひかり、
その温もりに包まれながら、
自然の偉大さ美しさを身体いっぱいに受け止める。
そのような日々を感謝しつつ、～祈りそして戯れる～。

(人間、老いるほどに幼児化し無邪気になるって本当でした！)

最近リタイアした私は、このような毎日には惹かれ憧れているのです。)

以上のような心情をもととして、曲は Lento の即興的な曲想の第一部分、リズミックでテクニカルなフレーズが交錯する Allegro の第二部分、そしてカデンツ的要素を含む第三部分及び短いコーダ、で構成されています。

元々ピアノとオーボエのために発想した曲なので、オーケストラでどのように聴こえるか心配でもあり楽しみもあります。内容的には一貫して比較的分かりやすいテーマで通しているので、気楽に聴いていただける曲と思っています。

構造的にも何の変哲もない三部形式ですが、オーボエの魅力を生かすには、このような普遍的な構造の方が、曲の各部分でオーボエに耳を向けさせることができ効果的であると考えました。

2004年8月 保科 洋

☆保科 洋／管弦楽のための『懐想譜』

(演奏時間：約8分)

『懐想譜』一兵庫教育大学吹奏楽部のために— この曲は、私の兵庫教育大学定年退官に際して、同大学吹奏楽部のために作曲したもので、先月2月16日に完成したばかりの作品である。曲は退官を目前にした私の吹奏楽部への想いを綴ったもので、この19年間の楽しかったこと、懐かしい思い出などを振り返りながら、現在の心境を込めて作曲したつもりである。

創作時間が限られていたこともあって、複雑な内容では練習が間に合わないので、構成的には単純な三部形式をとり、技術的にも易しくなるように配慮したが、私としては素直に書けたと思っている。

なお曲名は、部員の公募により選ばせてもらった。

この曲が未永く兵庫教育大学吹奏楽部に愛されることを願っている。

=保科 洋=

(兵庫教育大学吹奏楽部第17回定期演奏会[2001/3/10] パンフレットより引用)

(保科アカデミー室内管弦楽団第5回定期演奏会のために、2001年7月作曲者自身により

管弦楽版に編曲された。その後さらに一部オーケストレーションが改定された。)

☆ベートーヴェン／ヴァイオリン協奏曲二長調 作品61

(演奏時間：約45分)

世の中には3大ナントカというものが非常に多い。クラシック音楽の世界もご多分に漏れず、バッハ・ベートーヴェン・ブラームスのそれぞれの頭文字(B)をとって「ドイツ音楽の3大B」と呼ばれるし、これが「3大B(ブ男)」になるとバッハの代わりにブルックナーがエントリーされ(砂川しげひさ氏)、「僕の場合は、ベートーヴェン・ブルックナー・バッファローズだ!……といえよう」(宇野功芳氏)なんて言っている人もいます。ヴァイオリン協奏曲にも3大協奏曲と呼ばれるものがあり、たいていはベートーヴェン・ブラームス・メンデルスゾーンの作品を指して言います。今ここで「たいてい」と言ったのは、「いや、チャイコフスキイを入れるべきだ」という意見もよく聞くからです。もともと先ほどの3つを3大協奏曲と呼んだのは、ハイフェッツやエルマンらの教師としても有名なアウアーだということですが、この

曲目解説

人はチャイコフスキーに自作の協奏曲の初演を依頼された時に「演奏不可能」と言って一蹴した人ですから、チャイコフスキーを入れなかつたのは当然でしょう。まあ、特に3という数字にこだわらないで4大協奏曲と言つてもいいのですが、いずれにしてもベートーヴェンが外れることはまずないでしょう。それくらいこの作品は広く認められており、したがつてこれ1曲を指して「ヴァイオリン協奏曲の王者」と呼ぶことすらあります。ちなみにこれら4つの協奏曲、偶然(?)とは言え、いずれもそれぞれの作曲家にとって唯一のヴァイオリン協奏曲です。もしこのうちの誰かが2曲残していたら「3大協奏曲」の行方はどうなつていただでしょ?——ぼくは2曲まとめてエントリーから落ちると思います。一人だけ2曲だとなんだか落ち着きが悪いので…。逆に言うと、バッハやモーツアルトがもし1曲しか書いていなかつたのだとしたら、(確かにあまりデカくはないのですが)あるいは…。話が脱線したようです。戻しましょう。

ベートーヴェンの曲はいつだつて第1楽章であんまり何度も同じふしが出過ぎて「おやまたか」と思はせられますし、ベートーヴェンが大嫌いだったドビュッシーは「ベートーヴェンが展開部に執着するのもう何も話すことがないからだ」と言ったということですが、ここでも例によつてそういうことがなされております。第1楽章はティンパニの「トントントントン」という静かな4連音で始まります。これはベートーヴェンが、木魚を叩く坊さんの姿を見て思いついたとか違うとか…というのは真っ赤なウソですが、たびたび、執拗にこのリズムが出てきます。「運命」で「ジャジャジャジャーン」が第1楽章に120回以上出てくるのと同じで、ベートーヴェンは気に入ったリズムがあると、とにかく厚かましくもくどいです。ベートーヴェンはある手紙の中でこう言っています。——「この協奏曲の第1楽章で私は4つの拍をあたかも運命の鼓動として強く印象づけておきたかったのです。」

曲は少し哀愁を帯びたような旋律が木管楽器に始まり、先のリズムと共に新たな旋律も加わって、オーケストラと独奏ヴァイオリンが互いに表になつたりバックにまわつたりしながら、時に激しく時に美しく進んでいきます。そしてかれこれ20分近くすると、例のリズムがオーケストラに大きく響いてパッと静まります。ここからが「カデンツア」と呼ばれる部分——つまり独奏者最大の見せ場です。カデンツアと言うのは独奏者が文字通り一人で好きに演奏していい部分で、昔は10分以上も演奏した人もいたらしい。普通は作曲者自身が書いたものや、有名なその道の大家が書いた譜面を奏することが多いのですが、この曲ではベートーヴェンは自分でカデンツアを残しませんでしたので、ヨアヒムやクライスラー、前記のアウラーらが書いたカデンツアが広く用いられています——が、今日はナント!独奏者の松原氏自身が今回の演奏会のために書き下ろしたカデンツアを聴くことができます(世界初演)。この原稿の執筆時点ではまだその全貌は明らかになつていません……ってゆうかまだ1小節しか聴かせてもらつてない!その1小節と言うのは、確か例のリズムを3重音で強奏するというものでした。もしかしたら団員も当日本番中に初めて聴くことになるかも知れません。いろんな意味でドキドキです(楽しみだというのと、次の入りで出られなかつたらどうしようという不安で…).皆さんも請うご期待!——カデンツアが終わると第1楽章ももうすぐ終わりです。

協奏曲の第2楽章はだいたいどの曲も静かなものと相場が決まっています。この曲も終始静かに推移していきます。弱音器をつけた弦楽器群の安らぎに満ちた旋律、その間を縫つて歌う独奏ヴァイオリンの優美なこと!眠るための条件は完全に満たされたと言えます。よほどのことがない限りティンパニの最強打で飛び起こせるなんてこともしません。ご安心ください。しかしそれはナント贅沢な居眠りであることでしょう。起きておけばよかった、と後悔しても知りませんよ(そういうれば飛行機のCMでこういうのあったな…).ただし、弦楽器群が弱音器をガサゴソと慌てて外しだしたら、ちょっとだけ大きな音が鳴るかも知れません。第3楽章が近いということの合図です。

第3楽章には切れ目なく移ります。独奏ヴァイオリンが跳ねるようなリズムの旋律を弾き出すからすぐそれと分かるでしょう。これはオーストリアの民族舞曲のようです。おしまい近くには、再度カデンツアが入ります。こちらも松原氏自作世界初演です。こっちはカデンツアの後、ぼくには17小節の休みが与えられているので、聴衆に仲間入りしてじっくり聴こうと思ってます。楽しみだなあ!そしてラストでは、元気いっぱい!騒然たるクライマックスが築き上げられます。

最後にベートーヴェンのお茶目な駄洒落を一つ紹介しときましょう。完成したヴァイオリン協奏曲の譜面に、ベートーヴェンは献辞をこう記しました。——「ウィーン劇場の首席ヴァイオリンで宮廷劇場監督であるクレメントのために、クレメンツア(お情け)をもつて、L.v.ベートーヴェン作曲す。1806年」

<文責:山本浩之 H.11卒部 ピオラ>

現在の日本にあって、ヨーロッパ音楽にかかわること

西 欣也

学部での勉学を終えて後、さらに芸術学を研究する道に進んだことと関係しているのでしょうか、ここ十年来、秋山氏から「何を書いててもよいから」と、保科アカデミー室内管弦楽団の演奏会パンフレットのために原稿依頼を頂戴するようになりました。もっとも、芸術学と一口に言っても、その領域は多方面に分かれていますが、私は音楽学の専門家ではないのですが、それでも秋山氏から曲目を知らされると、多少リサーチめいた作業をしたりCDを聴いたりしながら、楽曲の生まれた時代環境や作曲家の精神姿勢についてあれこれと考えをめぐらし、それを未熟な文章にしてきました。元来、音楽をめぐって書かれたエッセイに面白いものは稀で、私の書くものも例外とは言い難いのですが、ちょうど演奏家が音楽を通して作曲者の生を生き直すように、思考によって芸術の生成の現場を生き直すようなものを、そしてなにより他の演奏会のパンフでは見かけないものを書こうと心掛けてきました。今、振り返ってみて、とにかく年に一度、ヨーロッパ音楽について考える貴重な機会を与えられてきたことに大いに感謝しています。

しかし今回は、少々違った書き方をしましょう。これまで私は、自身がどういう位置からパートーヴェンやドビュッシーを語っているかは曖昧にしたままで、文章を綴っていました。要するに、それが普通に「客観的な」批評文の叙述というものです。けれども今、この文章の中で初めて私は、演奏会にいらした皆さんに向かって、地方の大学オーケストラやこの「アンサンブル＝ハルモニア」に係わる人間という資格とともに語り、また皆さんと共に西洋音楽との関係を築いている状況について、少しばかり反省を加えてみたいと思うのです。

しばらく前から久しぶりに、学生オーケストラの演奏会に足を運ぶ機会をもっています。そこでいつも驚かされるのは、(演奏とは関係ないのですが) 関西で目にする演奏会のパンフレットが、私たちの学生時代に岡山で作っていたものと完全に同じフォーマットで制作されていることです。とりわけ、楽屋落ちの内容で一人一人を紹介してゆくパート紹介の文章や、その傍らに添えられた、戸外でメンバーがおどけたポーズをしながら楽器を構えたり、腰に手をあてて厳めしく立った卒部生を他のメンバーが微笑しながら取り囲んでいたりする写真を見て、私は驚嘆してしまいます。私が大学オケで楽器を弾いていた時代というのは、ようやくレコードに代わってコンパクト・ディスクなるものが現れた頃、学生への就職の誘いも今からは考えられないほど盛んな頃で、またドイツを共産圏と自由主義圏とに隔てる境界が取り扱われるのを世界が見守るという時期でもありました。つまりはその後、時代は甚だしく移り変わったという実感を私は抱いていたのですが、例のパンフを見ると、永遠に変わることのない学生オケの世界が連綿と続いていることを思い知られ、そこに一度に連れ戻されたような気がするのです。

正直なところ、私はその世界に懐かしさよりは気恥ずかしさを覚えますが、そのきまりの悪さの一部は、若く無思慮であった学生時代の自分を否定したいという感情から来るものに違いありません。ですが、私の狼狽ぶりにはもう少し客観的な理由があると言えないこともないのです。実際、大学オーケストラの演奏会パンフレットが現在どれだけ画一的なものか、そうだとしてもいつ頃からこのスタイルが続いているのか、知る由もない私は、バブル時代から後のこの二十年ほどをあいだに一律の自己表現様式が学生たちのあいだに広まり定着してきたらしいのと同じほどに、それ以前の二十年間も、学生オーケストラのあり方に変化がなかったものだろうかと、疑わずにいられません。言うまでもなく、ここで私は、これから的学生オーケストラがもっと自由な発想で多彩な演奏会パンフレットを作成するよう提案したいわけではありません。二十年ほどもさしたる変化のないまま保たれてきた大学文化サークルの自意識のようなものが、東洋の裕福な一国家にある立場と西

洋文化との距離を問い合わせを失ってしまった日本社会の自足した意識と、どこかで繋がっているのではないかしら、と思えてならないのです。

たまたま目にした学生オケのパンフから、現代日本の社会意識を云々するというのも、いかにも大袈裟な話でしょう。けれども、芸術学という学問の領域の周辺で日々、読んだり話したりすることを繰り返していると、みずからが所属している歴史的・地理的位置と芸術家の生きた世界との関係を具体的に見定めようとすることがいかに重要であるか、しかもそうした配慮がいかに私達の日常の芸術観のなかに欠けているか、ということにいつも敏感にならざるを得ないです。永遠不变の芸術美の世界を夢のように空虚に前提したり、大芸術家と自分の感性をダイレクトに合一させたりする人々がいるかと思えば、反対にシェークスピア文学もピカソの絵画もヨーロッパ人の芸術であって「我々」の文化ではないと、同様に抽象的な言葉を呼び出す人々があります。私はといえば、たえず変化し続ける世界と社会のうちで自分と芸術とが向かい合っている事実を意識することこそ大切だと考えています。音楽に即して言うなら、バブル社会以後の現代日本という位置を介して、クラシック音楽と自分たちとの関係を考えたいということ。たとえば、小沢征爾氏が指摘してきたように、日本では、経済力によって海外から招かれた演奏家の演奏と日本人演奏家の演奏とのあいだに厳然と「ダブルスタンダード」が保たれています。これに対して、一つの基準でもって西洋文化への距離を自覚するような意識は、依然として希薄なままではないでしょうか。

一方で、私達の住んでいる社会は、なにも十年一日のごとき無批判な幸福感にばかり包まれているわけではありません。事実、1960年代の後半に生まれた世代が、現在、これまでの人生を振り返って、かつこれから時代を見通して、現在を転換期と捉え、思い切って新しい人生を選び直す姿に、私も個人的にしばしば出くわしています。もはや機能不全であることを明らかにし始めた企業や国の諸制度、個人が余暇や個性を犠牲にするよう強いてきた古い社会制度に対して少しづつ見切りをつけ、豊かさよりも人生の目標の探求に重心を移し始めた人々が少なくないことは、誰もが知るところでしょう。やはり1960年代の後半に生まれた卒部者たちが核となって立ち上げられた「アンサンブル=ハルモニア」が、音楽との充実した関わりを学生オケという人生の一通過点に限定せずに、各人の仕事と両立させながら着実に発展させることに成功してきたという現象も、私はこのような背景のもとで理解したいと思います。

ことによると、このようにみずからが生きて西洋文化に関わっている周囲の様子を一つの時代状況として見渡してみたくなるのも、68年生まれの私自身が、もはや若くはないためかもしれません。そもそも時代の状況などには関係なく、人は三十代の半ばには、若さを振り返り老成へ向けて人生の方向性を調整しはじめるものなのでしょうか。そういうえば、ベートーヴェンがヴァイオリン協奏曲を書いたのは彼が36歳のとき。 Francis·ベーコン卿は「若い人々は判断するよりも考案することに適し、忠告するより実行に適し、決まり切った仕事よりは新しい企画に適している」と書きましたが、このように言われてみると、なるほどヴァイオリン協奏曲の音楽においても、芸術家が、ある場合には予想外の着想で思い切った「行動」に出ているかと思えば、別の場合には決まり切った仕事をこなしてきた安定感を持って「忠告」しているかのようにも聞こえきます。ところが、よくよく考えてみると、ベートーヴェンという人の音楽には、いつでもこの老少の性質を兼ね備えているようなところがありやしないでしょうか。……しかし残念ながら、今回は彼の音楽について考えを進めていく余裕はありません。また次の機会にしましょう。

(にしきんや・平成3年卒部チェロ、甲南大学文学部助教授)

プロフィール

松原勝也 (まつばら かつや)

ヴァイオリン独奏



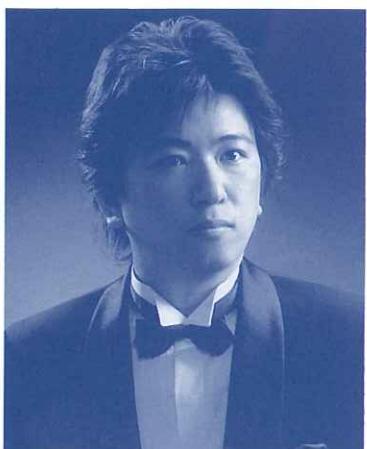
津上順子 (つがみ じゅんこ)

オーボエ独奏



津上 崇 (つがみ たかし)

テノール独唱



1963年東京生まれ。東京芸術大学在学中に安宅賞受賞。クライスター国際コンクール等で上位入賞。新日本フィルハーモニー交響楽団コンサートマスターを歴任。

バッハから現代までを俯瞰的視野でとらえた6回の無伴奏リサイタル、即興や、ジャズミュージシャンとのコラボレーションなど、常に既成の音楽観に一石を投じ続けるその演奏活動は極めて高い評価を受けている。ソリストとして新日本フィル、東京フィル、東京交響楽団、オーケストラアンサンブル金沢、神戸市室内合奏団など主要オーケストラと共に演奏。2001年より毎年開催される晴海「第一生命ホール」での「若手演奏家のためのアドヴェントセミナー&コンサート」をプロデュース。また津田ホール主催のプロデュース公演《松原勝也+プラス》では高橋悠治、安田謙一郎、福田進一、渡辺香津美とのコラボレーションが、《松原勝也+プラス2003》では若手演奏家達による【アンサンブル・ネクストジェネレーション】とのコンチェルト共演が話題を呼んだ。また2003年秋のジュニアフィルハーモニーオーケストラ欧州公演に指揮者、ソリストとして同行し、高い評価を受ける。そしてベートーヴェン弦楽四重奏曲全曲演奏を3年間にわたって行い絶賛を浴びた「さいたまアーツシアタークワルテット」も、2004年秋から新たな活動を展開する。

第17回中島健蔵音楽賞、第55回文化庁芸術祭新人賞受賞。さいたまアーツシアタークワルテットメンバー、静岡AOIレジデンスクワルテットメンバー、霧島国際音楽祭講師、東京芸術大学音楽学部助教授。

岡山市出身。13歳よりオーボエを始める。岡山市ジュニアオーケストラに在籍し、オーボエを有道惇氏に師事。山陽音楽コンクール1位。国立音楽大学音楽学部器楽学科でオーボエと室内楽を(故)丸山盛三氏に師事。大学4年時に元ペルリンフィルハーモニー首席オーボエ奏者(故)ローター・コッホ氏のマスタークラスに参加し、その後コッホ氏の薦めでスイス『レンク夏の音楽祭』室内楽コンサートでシューマン『3つのロマンス』を演奏し好評を得た。

国立音楽大学を卒業と同時にミュンヘンに留学。オーストリア国立・ザルツブルク・モーツアルテウム音楽大学に籍をおきコッホ氏の指導を受けながら、室内楽などの数々の演奏会に出演。特に1998年ミュンヘンでのリサイタルは高く評価された。2001年倉敷での保科アカデミー室内管弦楽団活動再開記念演奏会ではバッハ作曲『オーボエとヴァイオリンの為の協奏曲』のソリストをNHK交響楽団コンサートマスター篠崎史紀氏と共に成功を収めた。オーボエ、室内楽、吹奏楽等の指導の傍ら、ミュンヘンはじめドイツ各地、日本でソロ、室内楽の演奏活動を行なっている。岡山大学交響楽団オーボエパートトレーナー、NPO法人瀬戸フィルハーモニー交響楽団オーボエ奏者。

長崎県出身。大分県立芸術短期大学附属緑丘高等学校音楽科卒業。国立音楽大学音楽学部声楽学科を卒業し、ドイツ・ミュンヘンに留学。ザルツブルク・モーツアルテウム音楽大学夏季アカデミー、ドイツ・アウグスブルク・L.モーツアルト音楽院で声楽とオペラ、ピアノを学ぶ。

学生時代より教会でのカンタータやオラトリオのソリストをつとめ、1996年ミュンヘンでの初リサイタル(シューマン作曲歌曲集『詩人の恋』全曲他)は新聞にとりあげられ好評を得た。合唱や声楽の指導のほか、ソリストとして活躍し、98年には南ドイツの由緒あるボーリング修道院バロックザールでドイツ歌曲の夕べを開き高い評価を受けた。また若い声楽家音楽家とファミリーコンサート、レクチャーコンサートを開催し、昨年の岡山での『ハイネの詩による歌曲』コンサートは注目を集めました。ミュンヘンをはじめドイツ各地、スイス、オーストリア、日本各地でリサイタルやコンサートに出演し、ドイツ歌曲から宗教曲、オラトリオ、モーツアルトオペラを中心に演奏している。声楽を中本達美、浅野久子、瀬川武、J・ロイブル、R・クノール、J・ハマーの各氏に師事。

プロフィール

保科 洋 (ほしな ひろし)



名誉指揮者、音楽総監督

昭和 11 年東京に生まれる。両国高校卒業後、昭和 29 年東京芸術大学作曲科入学。昭和 35 年同大卒業とともに、毎日コンクール作曲部門管弦楽曲の部第一位入賞。昭和 38 年には、文部省芸術祭奨励賞受賞。東京音楽大学、愛知県立芸術大学を経て、昭和 58 年兵庫教育大学教授。平成 13 年 3 月定年退官し同大名誉教授となる。作曲・指揮の両面で活躍。

吹奏楽の作曲においては、日本を代表する一人で、海外でも評価は高い。全日本吹奏楽コンクール課題曲も過去 3 回委嘱されている。

作曲家としての見地から、また多くのアマチュア音楽団体の豊富な指導経験と、理論的根拠に基づく独自のユニークで説得力のある音楽解釈は、近年注目を集め高く評価されている。それらの集大成として、音楽の友社より『生きた音楽表現へのアプローチ』＝エネルギー思考に基く演奏解釈法＝（保科 洋著）として出版された。類書のない理論的音楽解釈法として、アマチュア音楽愛好家はもちろん専門家の間でも評判になっている。

主な作品に、オペラ「はだしのゲン」、「交響曲」、オーケストラのための「寂」、古記、祝典舞曲、カタストロフィー、パストラーレ、饗宴、風紋、シンフォニック・オード、メモアール、シンフォニック・メタモルフォージス「清明」、ユーフォニアムとピアノのための幻想曲、チューバと吹奏楽のためのコンチェルティーノ、オーケストラのための変奏曲、などがある。

秋山 隆 (あきやま たかし)



常任指揮者

昭和 40 年岡山市に生まれる。高松中学校吹奏楽部にて奥原弘巳氏に指導を受け当時新設の岡山一宮高校に進学。昭和 58 年岡山県では初の学生指揮者による吹奏楽コンクール A 部門金賞受賞として注目される。

昭和 59 年岡山大学医学部入学と同時に、岡山大学交響楽団にトランペット奏者として入部。現役時代には学生指揮者を務め、昭和 62 年の第 2 回全日本大学オーケストラコンクール第 1 位獲得に貢献する。卒部後サブコンダクターとして、常任指揮者保科洋氏のアシスタントを行い今日に至る。

平成 6 年当団を同級生後輩らと独自に組織し、責任者兼指揮者として活動。第 4 回定期演奏会後、医学部助手を休職しアメリカ留学（カリフォルニア大学バークレー校客員研究員）。その間当団も活動を停止。帰国後活動再開。

トランペットを鈴木勝久氏に師事。指揮法を奥原弘巳氏、保科 洋氏、David Milnes 氏に師事。

平成 14 年 10 月より川崎医科大学病理学教室講師。医学博士、病理専門医。夫人は当団ヴィオラ奏者。二児（中 2 男、小 5 男）の父。オーボエ独奏の津上順子は実妹。

鷲野 亜紀 (わしの あき)

コンサートマスター



旧姓：盛田。5 歳より（故）木村善之氏にヴァイオリンを師事。

岡山一宮高校卒業後、岡山大学文学部言語学科入学と同時に岡山大学交響楽団に入部。同団コンサートマスターを務め、第 38 回定期演奏会ではサン=サークス作曲『序奏とロンド=カブリチオーソ』を共演し好評を博す。

当団発足時からのコンサートマスターであるとともに、岡山交響楽団及び岡山大学 O B 交響楽団でもコンサートマスターを歴任し、遺憾なくその才能を發揮している。『アンサンブル=アルケミー』における室内楽の分野でも高い評価を受けている。

第 5 回定期においては、チャイコフスキー作曲／組曲第 4 番『モーツアルティアナ』終曲、第 6 回定期ではベートーヴェン作曲『ロマンス』でも素晴らしい独奏を披露し、絶賛された。

当団トランペット奏者鷲野氏と結婚後、島根県に居住。一児の母。

現在、島根県立松江東高校英語科教諭。同校弦楽部顧問。

過去の演奏活動

1994/8/7 [日] サンパルホール沼隈（福山市）
＜チャリティーコンサート＞ 指揮：秋山 隆
☆ベートーヴェン／交響曲第1番ハ長調 その他

1995/7/29 [土] 備前市市民センター
＜木村病院開設 15周年記念特別演奏会＞
☆モーツァルト／歌劇『劇場支配人』序曲 K. 486
☆モーツァルト／ディベルティメント 二長調 K. 136
☆ベートーヴェン／交響曲第1番ハ長調

1995/8/6 [日] 倉敷市芸文館
＜第1回定期演奏会＞ 指揮：秋山 隆
☆モーツァルト／歌劇『劇場支配人』序曲 K. 486
☆チャイコフスキー／ロココの主題による変奏曲
 チェロ独奏：山崎 泉
☆ベートーヴェン／交響曲第1番ハ長調

1996/8/17 [土] 三木記念ホール（岡山市）
＜第2回定期演奏会＞ 指揮：秋山 隆
☆モーツァルト／歌劇『ドン・ジョバンニ』・ハイライト
☆モーツァルト／交響曲第41番ハ長調『ジュピター』

1996/11/9 [日] 兵庫県東条町コスマックホール
『中学音楽共通鑑賞教材』&『指揮法ビデオ講座』
 ビデオ収録（指揮・解説：保科 洋）
☆ベートーヴェン／交響曲第5番『運命』 その他

1997/8/16 [土] 岡山市民会館大ホール
＜山本拓也氏追悼演奏会＞（指揮：秋山 隆）
第1部：保科アカデミー室内管弦楽団
☆ストラヴィンスキイ／組曲『ブルチネルラ』より序曲
☆水田年紀／弦楽オーケストラと2つの独奏楽器の為の
 『追憶』～T. Y. に捧ぐ～（委嘱作品・初演）
☆ラヴェル／『亡き王女のためのパヴァーヌ』
☆R. シュトラウス／『四つの最後の歌』より、
 III. 眠りにつこうとして ソプラノ独唱：岡崎 順子
第4部：山本拓也『復活』オーケストラ
 （保科アカデミー及び岡山大学交響楽団の
 現役・OBを中心とする特別編成のオーケストラ）
☆マーラー／交響曲第2番ハ短調『復活』
 第1楽章 第4楽章 第5楽章より（編曲：秋山 隆）
 アルト独唱：矢内 淑子 ソプラノ独唱：岡崎 順子

1997/9/17 [日] 倉敷市芸文館
＜第3回定期演奏会＞ 指揮：秋山 隆
☆モーツァルト／歌劇『フィガロの結婚』序曲
☆同／VnとVaの為の協奏交響曲変ホ長調 K.364
 （ヴァイオリン：松原 勝也・ヴィオラ：古川原 裕仁）
☆ベートーヴェン／交響曲第2番ニ長調

1998/8/23 [日] 倉敷市芸文館
＜第4回定期演奏会＞ 指揮：秋山 隆
☆ブラームス／『ハイドンの主題』による変奏曲
☆モーツァルト／ホルン協奏曲第2番変ホ長調 K. 417

 ホルン独奏：杉本 賢志
☆メンデルスゾーン／交響曲第4番イ長調『イタリア』
2001/4/15 [日] 倉敷市芸文館
＜活動再開記念特別演奏会＞ 指揮：秋山 隆
☆テレマン／ヴィオラ協奏曲（独奏：古川原 裕仁）
☆バッハ／オーボエとヴァイオリンの為の協奏曲
 （オーボエ：津上 順子・ヴァイオリン：篠崎 史紀）
☆モーツァルト／ヴァイオリンとヴィオラの為の
 協奏交響曲変ホ長調 K.364
 （ヴァイオリン：篠崎 史紀・ヴィオラ：古川原 裕仁）

2001/9/22 [土] 兵庫県東条町コスマックホール

2001/9/23 [日] 早島町『ゆるびの舎』
＜第5回記念定期演奏会＞
☆J・シュトラウス／喜歌劇『こうもり』序曲
☆保科 洋／管弦楽のための『懐想譜』（初演）
☆チャイコフスキー／組曲第4番『モーツアルティアーナ』
 より終曲 Vn Solo：鷺野亜紀（以上指揮：秋山 隆）
☆ブラームス／交響曲第3番へ長調（指揮：保科 洋）

2002/8/18 [日] 備前市市民センター

2002/9/14 [土] 久世町エスパスホール

2002/9/15 [日] 倉敷市芸文館
＜第6回定期演奏会＞ 指揮：秋山 隆
☆ベートーヴェン／『ロマンス』へ長調
 ヴァイオリン独奏：鷺野亜紀
☆ベートーヴェン／ピアノ協奏曲第1番ハ長調
 ピアノ独奏：有森 博
☆ベートーヴェン／交響曲第3番変ホ長調『英雄』

2002/11/14 [木] ホテルグランヴィア岡山

＜日本病理学会総会懇親会＞ 指揮：秋山 隆
☆モーツァルト／アイネクライネナハトムジーク その他

2003/8/23 [土] 兵庫県東条町コスマックホール

2003/8/24 [日] 倉敷市芸文館
＜第7回定期演奏会＞ 指揮：保科 洋
☆ワーグナー／『ジークフリート牧歌』
☆レスピーギ／リュートの為の古代舞曲とアリア
☆ウェーバー／クラリネット小協奏曲（独奏：藤井一男）
☆ドビュッシー／『牧神の午後』への前奏曲
☆ラヴェル／『亡き王女のためのパヴァーヌ』
☆ラヴェル／『クーブランの墓』組曲
 （ウェーバーは東条のみ、ドビュッシーは倉敷のみ）

演奏会によせて

松原 勝也

創立 10 周年、本当におめでとうございます。

保科先生のこれまでのご尽力、そしてそのお人柄に絶大な信頼をよせてきた団員の皆様の音楽に対する情熱、純粋な気持ちが、このオーケストラの現在を支えているのだと思います。このような記念のコンサートでいっしょに演奏できますことを心より楽しみしております。

(まつばら かつや・ヴァイオリン独奏)

津上順子

保科アカデミー室内管弦楽団創立 10 周年おめでとうございます。記念すべき年に保科先生の作品と一緒に演奏させて頂きます事をとても光栄に思っております。

益々保科アカデミー室内管弦楽団が発展し、そしてこのオーボエのための素晴らしい作品が、今後世界でたくさん演奏されるようになることを願っております。

(つがみ じゅんこ・オーボエ独奏)

津上 崇

私は歌曲とオペラをきっちり分けて考えるのではなく、どちらもドラマティックなものだと思っています。歌曲（リート）はモノドラマであり、1曲数分間の中で様々な人間的な情感を演じることが出来るのです。シューベルトの歌曲は音楽的な発想の宝庫であり、展開の豊かさ、ドラマ性、暗示される多彩な音の世界など、いろいろな要素が含まれています。その歌曲の世界にオーケストラが入り、これによって親密な個人的なリートの性格が拡大され、幅広い説得力をもつ、色彩豊かな音楽に形成されています。今回、保科洋先生のオーケストラ編曲で保科アカデミーの皆さんと一緒に、どんな新しい色彩感が出るのか、とても楽しみにしています。またこの場を借りて、保科先生をはじめ、秋山隆氏とアカデミーの皆さんに感謝の言葉を述べたいと思います。そして保科アカデミー室内管弦楽団 創立 10 周年おめでとうございます。

(つがみ たかし・テノール独唱)

保科先生のこと

有田耕司

秋山君から原稿を頼まれて、いつも深く考えずに軽率に引き受けてしまい苦しむはめにおちいる。保科先生のことはもちろん大好きなので、この保科アカデミー・アンサンブル=ハルモニアのプラグラムに寄稿することは喜びとするところなのだけれど、夏の一時期をウツウツと題材が浮かび上がってくるまで過ごすのだ。

保科先生と出会ったのは今から 30 年近く前のことになる。その時私は 18 歳の少年で、先生は 39 歳の壯年であった。初めて出会った時から親しく接していただき、今は無い岡山大学の合宿所のゴエモン風呂に一緒に入ったりしながら、「有田、ガッコウはな、4 年で卒業するところじゃないぞ、もったいないゾ。」と言われた時から私の人生の進路は大きく舵が切られたのだった。

幸いにして横から出たりせずに何とか 6 年で卒業した私は、ごくフツーのサラリーマン生活を始め何とか今に至っているが、社会に出た当初は保科流生き方しか知らなかつた私は、世間一般ジョーシキ的処世がうまくこなせずアゲンストに若干とまどつたりもした記憶がある。

保科先生の生き方は大変魅力的である。まず我々が趣味としてとりこんでいる音楽を生業とされていることが大変うらやましく思える。もちろん大好きなことを生業とすることによる深い苦しみや悩みがあろうとは思うが、好きなことについて四六時中考え続けるということは、サラリーマンにとっては会社に対する背信行為のそしりを受けかねないが、正々堂々とそうできることは悩みや苦しみを超えて素敵なことだと思う。他のことは分からぬが、音楽についてはそう云い切れるのではないかと思っている。先生の興味の対象は大変広い。物理学とその発展としての宇宙。ひょっとすると宇宙が初めて、物理が後に続くのかもしれないが。将棋、マージャンなどの勝負事。直接確認したわけではないが、競馬、パチンコなどはそんなに大きな関心持っておられないと思う。それは、勝負の相手が人ではないからだ。勝負の行方に人との駆け引きが大きな要素をしめるものに心を引かれていらっしゃると思う。また、理詰めで未来を創っていく要素が将棋、マージャンにはあるが、パチンコなどには無いところも、重大なファクターであろう。理詰めという部分では、30 年近く前にパーソナルコンピューターがまだ身近なものではなく、8 ビットのマシンがやっと市場に出てきて、DOS-BASIC すら珍しく、マシン語やアセンブラーでプログラミングしていた時代にパソコンを購入されて何やら遊んでおられたように記憶している。自ら描いた設計図どおりに物事を作り上げていくことにおそらく魅力を感じておられて、これが作曲という行為では直接的に喜びを感じ、指揮と言う活動でも、他人の描いた設計図を読み解いて再構成して行くところに通じているのだと思っている。ビリヤードとゴルフが大好きだと言うことも先生という人間を理解するのに重要な因

演奏会によせて

子だ。ビリヤード、ゴルフも他の人との勝負を競うという意味において将棋などと同様に分類されるがスポーツという行為、しかも力を重要な因子とせず、技を重んずることから、自らの心理と肉体的活動の絶妙のバランスを要するということにおいて設計図どおりの実現により多くの困難が伴う。人に勝てないことよりも、自らの肉体と精神を思いのままに御することができないことに、大きなフラストレーションを感じ、征服せんと欲して、人から見てあきれてしまうほどの精進に没頭するのである。ゴルフの技の習得にあたっては、その奥の深さから、我流での限界を看破されプロからの教えを乞うことの必要を認識されたが、自らレッスンプロの門をたたくことはせず、奥様をしてレッスンプロのもとに通わせしめて、自らは奥様を通じて技の奥義を究めんとするところに、あくまでも自ら設計図を描くということへのこだわりと、権威をあえて避けて遠ざけるという先生の姿勢が見えておもしろいと思っている。

最近私もゴルフの魅力にとりつかれて、大きな法悦を求めて苦しむ毎日を送っている。読むものと云えば、ゴルフ関係の書籍ばかりである。今は、マイケル・マーフィーという米国人が書いた「王国のゴルフ」という難解な本と格闘している。秋山君から原稿を頼まれてこの本に逃避していた時に、正に先生の人生—それはすなわち私自身が実現したいと熱望している生き方であるが一を見事に云い当てた表現があり思わず膝を打った。

『人生とは次々に魅力にとりつかれていく一連の過程にほかならない』

私の人生もかくあらんことを切に切に願っている。

(ありた こうじ・S.54卒部トランペット)
岡山大学交響楽団OB会副会長

「《音律》は肉体となって、わたしたちの間に宿った」

梅田 環

「保科理論」(楽員たちは敬愛の心を込め「保科節」と呼ぶ)というのは、単に楽曲を楽譜に忠実に現実化するということを超えて、楽曲を「純正調」で理解し、演奏するという解釈理論であり、演奏理論である、と初めて聞いたとき、わたしは、「初めてに《ロゴス》があった。……《ロゴス》は肉体となり、わたしたちの間に宿った」という新約聖書のテキストを理解しました(ヨハネによる福音書1章1節から14節、新共同訳ではロゴスは《言》)。

古代北シリアに起こったと考えられるキリスト祭儀の「ロゴス賛歌」と呼ばれるこのテキストは、「太初の初めから動かし得ない約束としてのいのちのルール《言》がある。その外を外さなければ、尽きないいのちの喜びがある。そのルール《言》がわたしたち人間の耳目に届く親しい現実《肉体》となった」と、キリストの出現を歌っています。

ファウスト博士(ゲーテ)はこのロゴスをどうドイツ語に置き換えるかに腐心し、ついに「初めに《行為》があった」と訳すに至って、自ら納得するのですが、これに倣って、わたしもこのテキストを保科理論の真理性を言う言葉として聞きます。「初めに《音律》があった。……《音律》は肉体となり、わたしたちの間に宿った」と。耳の自然に馴染むように演奏される音楽は聴く者にとっては乾土に慈雨が染み入るように快いものですが、演奏する者にとっては、一種の回心ともいえる目覚めを踏まえた作業となるのではないでしょうか。

保科洋とそのオーケストラ(岡山大学交響楽団のこと)の演奏を初めて聴いたのは1970年代の初めの頃だったと思います。ですから、かれこれ30数年も前のことになります。その頃の楽員は今はもう50歳台半ばにあるのではないでしょうか。大学生のオーケストラごっこに付き合うような気持ちで岡山市民会館に足を運んだのです。ところが、演奏が進むにつれ、上手い下手を言う傍観的な気持ちは失せて、不思議にスリリングな大学オケの魅力に惹きつけられました。付き合うという気持ちは粉砕されてしまって、声援を送るようになっていました。それ以来、今年の出来具合はどうだろうかと不安ちょっぴり、期待をもって毎年のサマー・コンサートと定期演奏会に出かけています。

いつの頃からか、10年も聴いてからでしょうか、単に一期一会の演奏に集中する大学オケのひたむきさの魅力だけではない岡大オケ固有の聞かせる音の秘密があることに気付きました。やがて、アンサンブルのたのしみに目覚めた自分の娘がこのオーケストラに入部することになって、その秘密の名を「保科節」というのだということを彼女から聞きました。しかし、それが指揮者の保科先生の演奏理論に基づくものであるとは知りませんで、保科先生の音楽に対するセンス、それも経験による感のようなものだろうぐらいにしか思っていなかったのです。

岡大オケ楽員の情熱は、単なる音楽好きを超えて、「保科理論」を実現しようとするひたむきさです。それが上手い下手を超えて、時に鳥肌が立つような響きに酔わせる秘密なのでしょう。ステージの上、保科先生と共に立ち居並び、聴衆の喝采に応えている楽員諸君の姿を見ていると、太初の初めからあった、そして、今その身側近くにある《音律》を究めようとする求道者の姿を見ているようです。また、その《音律》の喜びを体現し伝えようとしている伝道者の姿を見ているようです。

岡大オケを卒部してもなお「保科理論」による音楽創りを続けようという「保科アカデミー」の活動によって、さらに磨きのかかった「保科節」を聴くことができるのなんと楽しいことでしょう！

(うめだたまき・岡山バプテスト教会牧師)
保科アカデミー室内管弦楽団後援会会長

演奏会によせて

『保科洋・岡大オケ・アカデミー』

楠本 勝美

「クラリネット、音量大きすぎる！」

吹奏楽では花形のクラリネットも、オケの中では脇役が多い。気持ちよく吹き過ぎると、たちまちこのように厳しいお達しがある。

岡大オケでも例外ではない。でもちょっと他と違う。学生時代のある日の練習、和音合わせのこと。

「クラ2番。楠本、大きすぎる！」と保科先生。(2ndクラは脇役。映画でいえばフレームの隅にぼやけて写る通行人の役だ。言い過ぎかな...)」

「(心の中で)ええ? ピッチは完璧だし、これ以上音量おとしたら音にならん。」と、ふてる私。ではと試しに、吹きまねをして音を出さないでみた。すると「OK」とのこと。「ガーン!」何という仕打ちだろう。自分の存在を不要とされたような気にさせられて愕然としたのであった。

このような話は、私だけでなく、おそらく岡大オケ出身者に共通した体験だと思う。

保科先生の和音合わせには、純正調で合わせることはもちろんのだが、なかでも和音の第3、7音のピッチとバランスのとり方に特徴がある。

まずピッチ。いわゆる吹奏楽の指導本には「長三和音の第3音はやや低めに」なんて書いている。もちろん低めに吹く点ではそのとおりなのだが、私の実感では、「かなり低めに」である。理論上平均律から14セント低くすることがどういうことなのか、実際にチューナーを見ながら実験してみるとよくわかる。少なくとも「やや」ではないはずだ。

また、さらに美しく響かせるために、3音、7音の音量を「かなり」おとさないとOKがでない。ところが、ピッチを下げ音量を落とすと音色が犠牲になる。この時奏者としての存在意義を問われるようなかなりの葛藤を経験する。

しかし、純正なハーモニーが決まったときの美しさは、何とも言えない。やがてそれは快感となり、理不尽さを忘れ、いつしかその響きを自ら追い求めるようになってしまうのだ。(この感覚は、実際に体験した人でないとわからないと思う。卒業後もさまざまなオケで活躍している岡大オケマンは多いが、身に付けた独特のピッチやバランスのとり方のせいで、他の人と合わせ、陰口をたたかれていたりして...)」

このようなトレーニングを受けた岡大オケマン達は、そのうちコードネームを聞いただけで反射的にピッチとバランスをとるようになるし、いつも和音の中でどの音を担当しているのか考えるようになる。(実際にハーモニーが決まるかどうかは、別問題なんだけれど!) しかも副産物として、プロの実演やCDを聴いてもハーモニーが濁って聞こえる不幸な耳を持つことにもなる。

保科アカデミーには県外メンバーが多く、遠方からわざわざ岡山に集結するのはある意味異常だ。それはこのオケでないと味わえない響きがあるからではないか。

社会人となった今、練習時間も少なく、学生オケのような緻密な演奏はできないかもしれない。が、学生時代より幅広い表現力をもっていること、特異な和音合わせ能力によって短時間である程度の響きを作り出すことができること、これがこのオケの強みであり特徴(特長?)であると思う。

というようなことを知っていただくと、このオケの演奏がさらに楽しめると思う。多分…。

(ぐすもと かつみ・平3卒部 クラリネット)

* 第5回定期演奏会パンフレットより転載

10年目の邂逅

草野 健

けだし、10年という年月は一つの区切りというよりもその変遷の重みにこそ振り返るに相応しいということか。。。殊に、音の磨き方たるやこの10年で随分と形を変えることになった。

この度、この文章を読む方々には大別して二通りの方々がいらっしゃって、それはこのオケを少なからずも見守ってきてくださった方々と、初めてこのオケの音に相見える方々だろうか…。

前者の方々はこのオケの特殊性について幾つかの見識がおありで、必然的にこのオケの音の磨き方には独自の理論と行程が存在することを知っていらっしゃって、後者の方々は、特に音楽の経験がおありなら何を今更と思われるかも知れない。

が、しかし19歳や20歳で初めて弦楽器に触れた者達が多い中で、純正調の和音の響かせ方やフレーズにおける力学論がどれほど魅力的な概念だったことが想像してみてほしい。・

私に関して言えば、ヴィオラを持って数週間たったある日、先輩達の合奏で初めて聴いたブルックナー交響曲第7番2楽章の弦楽器のハーモニーの崇高さは感激するには十分すぎた。

それから18年間、様々なオケや弦楽四重奏でヴィオラを引き続けている中でも、このオケは特別な充実感の源であることを幾度も意識することとなる。それは、このオケは同じ大学の学生オケで研鑽を積んできた者たちの集まりであるだけでなく、その学生オケの指導者たる、敬愛する音楽の師が40年近い歳月を文字通り人生を費やす形でその理論を学生とともに練り上げていったが故の重みであろう。

このオケはその大学オケの卒部生や現役学生諸氏によって成り立っており、この独自の音の磨き方を共通語として、様々な曲にこの10年間アプローチしてきた。

この10年の歳月が少しづつオケ自身を変容させていったのか、思えば結団当初の音は繊細で透明な響きをヴィオラの席で感じていたのが、少しづつ硬質で色彩感を感じながら演奏するようになった。無論、プログラムに挙げる曲の特質が関係するのだが、そこはヴィオラならではの中音域を任される者故の感じ方かもしれない。

演奏会によせて

されども、今日の演奏会の為の練習で出会った音の数々は、齢を重ねていくが故の忙しさのおかげで個人練習がままならない中でも、時には一つのハーモニーを響かせるのに1時間かけたあの学生時代の音への憧憬を駆り立ってくれるに十分な、それでいて青年期から壮年期へと移りゆく際に捨てざろう得ないものへの寂寥を彷彿とさせるに足るものであったか・・・。

それこそ、この10年間、一人一人が我を捨てて純粹に追い求めた透明で爽やかな音が、それぞれのパートが覚醒したが如くフレーズを紡ぎながらハーモニーを響かせようとし、更には一人一人が意志をもってその曲に迫ろうと恣意性を持つに至った歳月は、一人一人の、学生から社会人へそして子どもの立場から自らが親の立場へと自立してゆく過程と重なり合おう。

このオケが演奏活動を続けていく限り、このオケの特殊性故の世代交代を繰り返して行くわけだが、この10年目の邂逅は誰のもともに訪れる季節のようなものか・・・。その邂逅は、やがてこのオケの新たな音の艶と昇華してゆくか、もしくは若い世代へと伝え繋ぐ後に世代の移りわりと共に去ってゆく残り香と化すか、いずれにしても、伝統という言葉だけでは片付けられない生身の音樂の証拠として刻まれてゆくことを切に願うだけである。

(くさのたけし・平2卒部 ピオラ)

棒振りのひとりごと

秋山 隆

＜シーベルト／交響曲第3番＞『未完成』や『グレート』に比べれば圧倒的に演奏頻度の少ないマイナーな曲です。実演をお聴きになるのは初めての方が多いと思いますが、どのような御感想でしょうか。これはもともとアマチュアオケのために作られたとされています。ハイドンやモーツアルトの影響を聞くことができますが、それでもやはり同年に作曲された『魔王』同様、確かなシーベルトラしさに溢れた佳作だと思います。

＜シーベルト／『ます』・『魔王』＞この2曲はよく御存知のことだと思いますが、今宵はオーケストラの伴奏で御聴き下さい。今回の演奏会のために保科先生に特別に編曲して頂きました。ちなみに、シーベルトと保科先生は誕生日（1月31日）が同じです。

＜保科 洋／『祈りそして戯れ』・『懐想譜』＞

オーボエ独奏を伴う管弦楽曲は比較的少ないので、今後はこの曲が重要なレパートリーになると思います。管弦楽版の初演を兄妹で実現できてこれにまさる喜びはありません。『懐想譜』の方は、すでに吹奏楽版では全国的に紹介されているそうですし、オケ版も国内外のプロオケが取り上げる予定とお伺いしています。

＜ベートーヴェン／ヴァイオリン協奏曲＞

第3回定期で松原氏と共に演させて頂いた時に、次はこの曲をと決めておりましたが、今回こうして7年越しで念願がかないました。しかも、ソリスト自作のカデンツアつきということで、喜びもひとしおです。中期を代表する大曲であり、そのスケールの大きさからも我々は演奏

会のメインとして取り上げました。特にアマチュアオケの演奏会ですと、協奏曲は練習量も少なく、ソリストにおまかせとなりがちですが、これはソリストつきの協奏交響曲というつもりで細部までこだわって練習を行いました。松原氏の胸をお借りして、我々のベートーヴェンに対する思い入れをお伝えできたらと思います。

＜木村病院＞私の恩師で、現在は岡山大学医学部長である岡田茂教授と、木村院長は高校・大学の同級生です。私が病理の大学院生となった時に木村病院をご紹介頂き、以来医学のみならず様々なことを教えて頂いております。今後ともどうぞよろしくお願ひいたします。

＜パンフ＞毎回素晴らしいエッセーを寄稿して頂いている西欣也氏は岡大オケではチーフを担当されました。部長としても大活躍でした。京都大学大学院文学研究科（美学美術史学専修）に進まれ、その後イギリスに1年間留学され、現在は奈良県在住です。奥さんはオケの同級生のクラリネット奏者です。毎回彼のエッセーを楽しみして下さっている後援会会員の方もおられます。スペースに余裕があれば、彼の以前の文章を再掲してたくさんの方にお読み頂きたいところですが...。当団のホームページ(<http://www003.upp.so-net.ne.jp/Horn/HoshinaAcademy/>)には過去の彼の文章の一部が掲載されております。ご興味がおありの方は是非一度、ゆっくりお読み頂ければと思います。

有田氏は我々の大先輩です。イタリアご赴任中、保科先生ご夫妻と、秋山の家族でお邪魔いたしました。現役時代以来、ラッパに関してはもちろん、大学オケのあり方、そしてアマチュアオケのあり方についていろいろと教えて頂いております。

我々の演奏会パンフは非常に文字数が多く、読み応え(?)があると思います。「芸術を鑑賞するためには知識や言葉は必要ない」あるいは「解説が必要な曲は不完全な作品だ」という意見も承知しています。しかし、知識や情報をふまえて鑑賞する方が、より楽しめる場合もあります。じっくりとお読み頂けたらと思います。そのためもあるって、演奏中あまり客席が暗くならないように配慮しております。

＜響塾洋楽堂＞岡山市郊外（足守）の私の祖父母宅を改造しました。2001年の夏以来、もっぱら私の父が週末大工で改装を進めましたが、メンバーにもボランティアを募って集中作業を繰り返し、2002年の春に落成式を行いました。命名由来ですが、保科といえば「洋」、アカデミーは一種の「塾」、室内は「堂」、管弦楽団から「楽」、アンサンブル＝ハルモニアの主眼は美しい「響」。これらを組み合わせて、響塾洋楽堂（ひびきじゅく ようがくどう）です。足守といえば緒方洪庵の出生地で、彼の偉大な業績の一つが『適塾』です。響塾には、保科洋による音楽塾の意味もあります。東京芸術大学に『奏楽堂』というホールがあります。岡大オケホルンのOBが建てられた練習場は『創楽堂』です。我々は西洋音樂を楽しむということで、洋楽堂としました。

＜東京公演＞ 個人的な内容で恐縮ですが、私は中学時代、吹奏楽コンクールで全国大会（東京・普門館）に出場することが夢でした。母校高松中学は当時県大会では1、2位を争う学校でしたが、中国地区大会では出雲勢などに阻まれ、全国大会への切符を手にする事ができませんでした。高校時代も吹奏楽に明け暮れましたが、新設の県立進学校でもあり全国大会などは夢のまた夢でした。そして岡山大学に進み、保科先生のもとでこれぞ本当の音楽というものに出会うことができました。コンクールという形式で演奏を競うことの是非はともかく、できるだけ多くの方に自分達の演奏を聞いて欲しいという欲求は、自己表現・自己主張が音楽の根本であることからも自然な感情と考えます。大学4年時に、コンクールをその目的ではなく、その手段として利用しようということで、第2回全日本大学オーケストラコンクール（東京文化会館）に参加しました。（参加を決めた直後にその日、生理学の試験がほぼ同時刻にあることが判明しました。試験を受けなかったこともあって、留年しましたが、今でも全く後悔していません。）結果は見事第1位でした！我々よりもるかにレベルの高い大学オケがたくさんあることはよく知っていますし、決して我々が一番だとは思っておりませんが、それでもやっぱり理屈

抜きにうれしいことでした。（ちなみに第1回は1位2位の該当団体はなく、翌年からコンクール形式をやめフェスティバル形式に変わりました。そのオーケストラ大会も昨年終了したそうで、そういう意味では岡大オケは文字通り最初で最後つまり唯一の第1位獲得団体となりました。）私にとっては中学以来の夢が実現したわけですが、同時に今度はやっぱりいつかは東京で自分達の演奏会を行いたいという希望に変わりました。今回その夢が実現できて感無量です。わがままなプログラムに、わがままな企画を快く受け入れて協力して下さるメンバー諸氏に心から感謝いたします。私のようなディレクターはともかく、妹夫婦のように才能ある若手演奏家に、その実力を發揮する素晴らしい曲を提供して下さった保科先生に感謝いたします。また経済的な面では木村穂積院長先生に大変御世話になっておりますが、今回特に東京公演に関しては私の両親が主なスポンサーとなっております。身内のことで誠に恐縮ですがオケの代表として感謝いたします。

創立10周年とはいえまだ未熟なオーケストラです。しかし、師から学び、私達で考えた私達の音楽を心をこめて演奏いたします。暑い夏のひととき、我々の演奏で少しでもおくつろぎ頂ければ幸いでございます。

（あきやまたかし・保科アカデミー主宰）

生きた音楽表現へのアプローチ

=エネルギー思考に基づく演奏解釈法=

保科 洋 著 音楽之友社 定価￥3,990（税込）

名演奏にはなぜ感動するのか？

そして『感性』といわれるものの奥に、『音』『音楽』の認知に関する人類共通の原理があったとしたら？

本著では『音符』とは《エネルギーが推移する状態の軌跡》であるとらえ、楽譜に潜在するエネルギーが描く起伏、抑揚を音符から読み取り、表現する方法を模索する。

演奏会のご案内

2004/12/11 [土] 岡山シンフォニーホール

岡山大学交響楽団第51回定期演奏会

指揮 保科 洋・秋山 隆

☆サン=サーンス／交響曲第3番『オルガン付』

☆レスピーギ／古風な舞曲とアリア 第二組曲

☆保科 洋／『Requiem～ある青年の死を悼んで～』

（委嘱作品・初演）

☆ロッシーニ／『泥棒かささぎ』序曲

保科音楽事務所

<http://www.hoshina-music.com/>

作曲家保科洋の音楽事務所です。

保科洋の音楽活動の紹介に加え、この度、一部の作曲・編曲の楽譜レンタルを開始致しました。

どうぞご利用下さい。

楽譜レンタル以外についてのお問い合わせはこちらまで。

office@hoshina-music.com

後援会のご案内

当団後援会は年会費3000円で小学生以上の方でしたら、どなた様でもご加入頂けます。当団演奏活動のご案内と演奏会毎に2名様分のご招待券をお送りいたします。

本日お配りしている、お手元のアンケート用紙にお名前とご住所をご記入の上、入会希望欄に印をつけて頂いた方には、後日入会案内と、年会費振り込み用紙を郵送させて頂きます。

下記まで直接ご連絡頂いても結構です。

後援会連絡先：700-0825 岡山市田町1-8-4 梅田 環

CHACONNE

DEALERS OF FINE VIOLINS

百年先まで届く響きを。

シャコンヌは、ヴァイオリンをはじめ、弦楽器のコンサルタントとして安心と信頼をお届けしています。

ご提供する楽器や弓は、ロンドンでのオークションをはじめヨーロッパ各地にて実際に目で見て吟味したものなどを輸入して揃えています。各店には、伝統的な修理技術をもとに日本の繊細な技術を生かした独自の基準をクリアした職人たちが常駐し、楽器本来の姿を取り戻します。また東京海上火災の代理店として楽器保険業務も行なっております。お客様が安心して演奏活動ができますよう、あらゆるご要望にお応えします。

地方展示会の開催や弊社担当者が全国各地を定期訪問、出張修理なども致しておりますのでご利用下さい。



<http://www.chaconne.info>

運命の一本との
出会いがここにある

弦楽器直輸入・修理・調整・楽譜・鑑定・楽器保険
株式会社シャコンヌ



名古屋店
名古屋市中区栄2-11-19
熊田白川ビル3F
TEL 052-202-1776
FAX 052-202-2990



東京吉祥寺店
武蔵野市吉祥寺本町1-31-11
KSビル904
TEL 0422-23-1879
FAX 0422-23-1876



金沢店
金沢市広岡1丁目212番
AGS IIビル502号
TEL 076-221-1779
FAX 076-232-3249

【全店共通】
営業時間／10:00～18:30
定休日／日・月曜日
E-mail : chaconne@pop06.odn.ne.jp



九州小倉店
北九州市小倉北区
京町4-5-27
ステーションプラザ
小倉駅前5F
TEL 093-531-2672
FAX 093-531-2574



札幌店
札幌市中央区北3条西1丁目1-1
ナショナルビル2F
TEL 011-221-2561
FAX 011-221-2562

ヴァイオリンレンタル
株式会社 カノン
名古屋市昭和区隼人町9-1ロイヤル松中2F
TEL 052-834-4911 FAX 052-839-1217

